

# 実践報告：ボランティア参加型学習活動

佐藤恵美子

馬場 尚子

安場 淳

## 0 . はじめに

「ボランティア参加型学習活動」は、中国帰国孤児定着促進センター（以下センター）における「日本語・日本事情」教育<sup>1)</sup>の特色を示す学習活動の1つである。センター開所当初から行なわれてきた活動ではあるが、その目的や活動の内容は当時に比べ大きく変化してきた。この変化は、日本社会の変化、例えば生涯学習、地域の国際化、市民レベルの国際交流、異文化との共生、ボランティア、そしてネットワークといった言葉に象徴される社会的気運の広がりや連動しているように思える。センターの学習活動に参加しているボランティアにとっても、本活動が学習体験の場として捉えられている事実をそれを感じとることができる。我々はここに、日本社会の異文化受容の可能性を、日本社会の側の自己拡張の1つの可能性をみるように思うのである。

我々の学習者が、それぞれ自分なりの方法を工夫して日本人とのコミュニケーションを学び日本についての情報を増やしていくように、接する日本人の側も、日本語の力が充分ではない人々とコミュニケーションを図る方法を学び異文化に対する理解を深めていく、つまり、参加者双方にとって有意義な異文化接触の場を作り出すことができるのではないかと、我々が現在目指しているのはそうした活動である。そのためには、教授者は学習活動計画者としてプログラム<sup>2)</sup>の質を高めていかなければならないのはもちろんだが、参加する日本人の側の充実感や達成感をも視野にいれてプログラムを企画運営するという、いわば「コーディネーター」としてのノウハウも蓄積していかなければならないだろう。現在必要とされているのは、この2つの立場を合

わせた評価体制の確立である。そこで、本稿では、まず我々が目指しているものの現段階での確認を行い、これまでの実践例をまとめるとともに、現在進行中の評価の試みについて記述したい。

1) センターの日本語教育は、異文化適応教育としての第二言語教育と位置づけられる。「日本語・日本事情」教育という名づけはこの意味による。「適応」という用語の周辺には、「適合」「順応」「同化」「調整」といった概念がある。センターでは、受け入れ側の自文化中心主義、つまり自文化に相手の同化を強いる立場ではなく、学習者と学習者の環境である日本社会との相互作用の面を重視する立場に立って「適応」を定義している。これは一般的には「調整 (accomodation)」という概念に近いものである。

2) ある目的を実現させるために計画構成された活動をプログラムとすると、本活動は、教育プログラムであるとともに、ボランティアと学習者にとっての異文化交流、また異文化理解プログラムとしての面を合わせ持つと言える。

- 目次
1. 「ボランティア参加型学習活動」とは何か
  2. 「ボランティア参加型学習活動」の企画と内容
  3. プログラム評価の試み
  4. 実践結果の報告
  5. 今後の課題

## 1. 「ボランティア参加型学習活動」とは何か

### 1-1. 現在の「ボランティア参加型学習活動」の発想

1985年、センター開所の次の年に、センターが設置された所沢の地域住民を中心としたボランティア組織が誕生し、さまざまな支援活動が行われるようになった。センターの学習活動参加もその1つである。この時期、我々が求めていたのは学習活動「参加」というよりは、教授者の補助的役割であった。例えば、シナリオに沿った面接場面の面接官役や、電話練習の相手、病院場面での医師や看護婦の役等、教授者のコントロールのもとに教授者が設定した役割を演じてくれる人であり、また、インタビューするされるといったコミュニケーション場面においても、学習項目となっているやりとりの質

問もしくは回答部分を受け持つという、いわばドリルの相手をしてくれる人を求めていたと言える。日頃の教室活動とは異なり教授者以外の相手役を得ることで、日本語の使用頻度を高めること、実社会での使用に近づけること、また、教授者以外の人と接する緊張感を利用して学習全体の動機付けを強化すること等が我々がねらった学習効果であった。これはこれでそれなりの学習効果を持つものではあったが、活動の回を重ねるうちに、この貴重な外部協力者の参加をこのように限定された役割に留めておいてよいのかという反省が生まれた。ボランティアが教授者の指定した役割を演じるのではなく、いろいろな背景を持った一生活者としてそのまま我々の学習者と接することで活動の意味が広がるのではないかと、一日本人として学習者と出会い、戸惑いや驚き、発見、コミュニケーションの達成感や挫折感を体験する、そうやって初めてほんとうの異文化間コミュニケーションが生まれるのではないかと、そのためにこそ「教師」ではない人が必要となるのではないかと、という発想がそれである。それは、活動の意義を根本的に問いなおすものであった。

活動が学習者にとって単に教授者以外の日本人と行うドリルの域を出ないのであれば、学習者とボランティア、この両者の関係は対等ではあり得ない。ボランティアはあくまでも学習者の学習対象である日本語日本文化をすでに身に付けている者であり、我々の学習者はまだそれを身に付けていない者という一面的な関係のみが取り出され、この関係性の中で、一方は、他を試しチェックする者であり、他方は試され評価されるだけの存在に限定されてしまう。そこでは、本来双方向であり、相互的であるべき異文化間コミュニケーションは生まれにくい。我々の学習者がボランティアを通して異文化接触体験をすることが、とりもなおさず相手のボランティアにとっても異文化接触体験となる、そのような対等な関係性が相互のコミュニケーションを活性化させるはずである。この発想に立って、活動を新たに意義づけし、そこから、もう一度活動を企画していく、こうした取り組みの中で形をとりつつあるのが現在の「ボランティア参加型学習活動」と言える。

これが可能となった背景には、外部協力者の増加というセンターの近年の状況がある。当初はボランティア団体も人数も限られていたが、近年はさまざまな動機から学習活動参加の希望者が増え、年代もタイプも広がった。ま

た、こちらからの呼びかけもあり、こうした活動を実施するための必須条件であるボランティアの動員が、偶発的ではなく計画的に期待できるようになってきたという事情がある。このような基盤ができて、学習者やボランティアのタイプに応じた「ボランティア参加型学習活動」が可能となってきたのである。

#### 1-2. 「ボランティア参加型学習活動」の位置づけ

それでは、学習活動にボランティアとの異文化間コミュニケーションを積極的に取り入れることはどのような意義を持つのか。ここではセンターのカリキュラム全体の中での位置づけについてまとめようと思う。

異文化適応を目指した予備的集中教育機関としてのセンターの教育目標は、学習者が日本社会に入るにあたって「自信と意欲」を持てるようにすること、そのために必要な基礎知識と基礎技能を身に付けさせることにある。日本社会での生活を通して情報を増やし、コミュニケーション能力を伸ばしていくことができるという自信をつけること、そこから意欲も生まれる。こうした適応に対する姿勢は、本来実生活での体験を重ね、自分なりの判断や実感を通して継続的に養われるものであろう。それを、「体験化」（安場他、1991）と呼ぶとすると、中国から帰国したばかりで日本人・日本社会との接触体験がほとんどない我々の学習者に、「小中国社会」<sup>1)</sup>とも言えるセンターの環境で、この「体験化」をどのように実現させていけばよいのだろうか。予備教育期間としてのセンターの4か月を、「体験化」が始まる前のモラトリアム期間とするのではなく、「体験化」を開始させる、より有効に「体験化」を促進させる期間とするためには何が必要か。「ボランティア参加型学習活動」はこうした必要に対して学習環境を改善し、学習環境に計画的に異文化接触体験を取り入れる試みとして意義づけられる。

教室における日常の「教授 - 学習」過程もまた厳密には異文化接触場面であり、まず教室を異文化間コミュニケーションの場として活性化させることはもちろん必要だが、この教室を基盤として「体験」の場を教室の外にまで広げること、つまり一般の日本人との接触体験をセンターの学習計画の中に組み込むことが前述した「学習環境の改善」にあたる。この、学習環境を実

社会に広げる、そして学習素材を社会に求める活動をセンターでは「実習」と呼んでいるが、これには、大きく2つの柱がある。1つは、実際に街に出る、または実際にセンターの外部とアクセスすることで目的とする行動を達成する、例えば、「交通機関を利用して目的地に行く」、「買い物をする」、「電話で目的とする情報を得る」といった活動であり、もう一方の柱がこの「ボランティア参加型学習活動」なのである。どちらも、教授者以外の日本人との接触を通して、異文化間コミュニケーションを図ることを目的とするものではあるが、前者が駅員や通行人、店員といった人々に学習者が働きかけて目的を達成させる活動であるのに対して、後者は、ボランティアと学習者、双方が場を共有する活動であることがその特色である。

- 1) センターの生活は、宿泊棟と研修棟との往復が中心となる。どちらの環境においても、接する教職員は中国語や中国の生活習慣にも明るい者が多く、学習者同士も当然母語・母文化を同じくする者同士であるため、実際の日本社会での生活のイメージがつかみにくい状態であると言える。

### 1-3. ボランティア参加型学習活動の構成要素

「ボランティア参加型学習活動」には4つの構成要素がある。参加者である「学習者」と「ボランティア」、この両者が出会う「活動の場」、そしてその活動全体をコーディネートする「教授者」の4つである。「ボランティア」の定義はさまざまになされているが、センターの場合は、ボランティアとして活動に参加することになった経緯およびその動機も、いわゆる一般のボランティアとは事情が異なっている場合が多い。従ってセンターでは、ボランティアを「教授者によるネットワークとしての働きかけに無償で応じてくれた人」と定義することとする。条件としては、我々の学習者の目標言語・目標文化である日本語・日本文化を持った人ということになるが、その他日本語・日本文化を第二言語・文化として学習したことのある人が含まれる場合もある。

この4つの要素の関わりを表したものが、次の図1である。

[ 図 1 ]

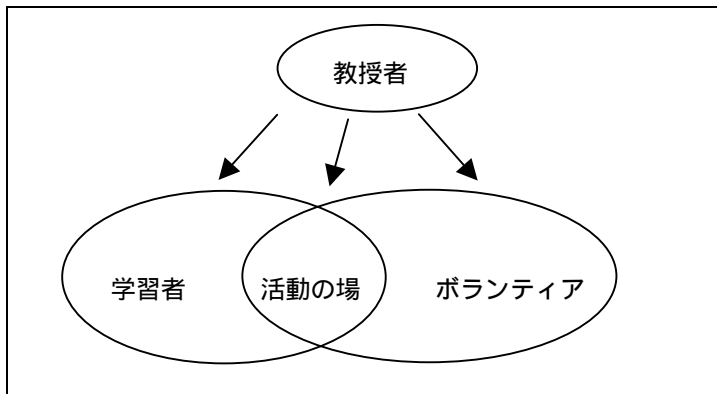


図1に表したように、「活動の場」は「学習者」と「ボランティア」が出会うことによって生まれる。ここでは「教授 - 学習」活動とは異なる学習環境が形成される。「ボランティア」は、教授者の代行やアシスタントとしてではなく、あくまでも一日本人として学習者と「出会う」。異なった文化・言語を持った者同士が「出会い」、両者の間にコミュニケーションが行われ情報交換が行われる、これが「活動の場」なのである。

この時教授者の役割は、「活動の場」を参加者同士のより直接的な出会いの場とすることであって、極力「教師」としての「場」への介入は避けることが肝要である。これは、教授者は活動の場に関わらないという意味ではない。異文化間コミュニケーションにはさまざまな段階と形態がある。教授者によるコントロールを全く排して参加両者がコミュニケーションを行う場合もあれば、教授者の援助のもとに異文化間コミュニケーションが成り立つ場合も当然ありうる。また、活動タイプによっては、教授者が司会や進行役を務めたり、通訳を行ったりする場合もある。いずれにしても「活動の場」の主体は参加両者であり、教授者の役割はあくまでもこの活動の管理・運営・補助・調整であることが重要な点である。

#### 1-4. 活動における教育目標

教育プログラムとしての本活動の目的（以後「教育目標」とする）はさまざまである。ここでは活動ごとの具体的教育目標についてまとめることは繁雑に過ぎるため、全体としての教育目標の領域について示すこととする。各活動の教育目標はたいいてい複数の領域にまたがり、学習者タイプに応じた学習目標（教育目標を具体的な到達目標として表したもの）と学習課題（学習者に課せられるタスク）を持っている。

本活動の教育目標の領域としては大きく次の3つが挙げられる。

日本語によるコミュニケーション能力

日本事情に関する情報

異文化理解

は言語・非言語によるコミュニケーション力を指すが、これには狭義の言語能力はもちろん、非言語も含めたコミュニケーション・ストラテジーの運用能力、社会文化能力、また広い意味でのインターアクション場面における問題解決能力も含まれている。活動を通してこうした能力を高めるとともに、コミュニケーションに対する考え方、コミュニケーションに対する姿勢を意識化することが目標となる。 には、自分達の身近な生活や将来の生活設計に関わる情報から、より一般的教養的な日本社会に関する知識や情報、そしてこれらの分野における情報収集の手段についての情報まで含まれる。ここでは、活動を通して情報・知識を獲得すること自体と、その方法を意識化することが目標である。当然、日本語を用いて情報収集する場合は、 の領域と組み合わせられた目標設定がなされることとなる。 で目指されているのは異文化理解に関わる日本事情や中国事情の知識の習得ではなく、それを題材に異文化（まずは日本文化）への関心を深めることである。 は他の領域と比べより長期的な体験の蓄積が必要な領域であるが、そのための第一歩として、まず自文化（センターの場合は中国文化）への気付き、そして相手文化である日本文化への気付きを促進させることが目標となる。こうした「気づき」を通して文化相対化の視点を意識化できれば理想的であろう。

いずれの領域においても、能力の向上と情報・知識の獲得、理解の促進に加えて、こうした体験を意識化すること、つまり「体験化」することが目標となる。これには、各領域についての意識化とともに、一般日本人との異文

化接触自体を学習者が自らの学習環境として意識することも含まれている。

## 2. 「ボランティア参加型学習活動」の企画と内容

この章では、現在センターで行われている「ボランティア参加型学習活動」の具体的内容についてまとめることとする。過去1年（センターの学習期間は4か月で、これを1期として年に3期の研修が行われている）の実践例を中心に、まず2-1では活動の企画に関わる要件について整理し、2-2では実践例のタイプ別分類を試みた。

### 2-1. 活動企画の要件

プログラムの企画者であり学習計画作成者である「教授者」の立場から、(1)学習者、(2)ボランティア、(3)その他について、企画に際し考慮すべき要素を整理すると以下ようになる。

#### (1)学習者

学習段階（その学習段階における学習目標と学習項目）

その他 以外の学習者（またはクラス）の状況

- ・人数
- ・年齢 / 性別
- ・学歴（識字者か非識字者か等）  
生活歴（生活形態・職歴・社会的身分等）
- ・一時帰国経験の有無 / 孤児本人かそれ以外か等日本との関わりの深さ
- ・性格 / 心理状態  
（クラスとして / 個人として・各成員間の人間関係等）
- ・興味関心の所在 等

は、学習者（またはクラス）のタイプに基づくカリキュラムによって決定される。センターでは、学習適性、日本語学習歴等を考慮して学習者をいくつかのタイプに分け、それぞれのタイプごとにカリキュラムを作成している。このカリキュラム全体の中で、学習者の現在の学習段階がどこにあり、その段階における学習項目は何か、その学習をどういう活動内容で実現させ



れば学習効果をあげることができるか、という発想から「ボランティア参加型学習活動」が選択されるわけであるから、まず が企画の第一要件として考慮されねばならない。また活動の内容によっては、 も大きくその成否に影響する。特に学習者のその時点での興味関心の所在はテーマの決定等いろいろな状況で関係してくる要素なので、場合によっては企画にあたり学習者に対するアンケート調査等を行うことも必要となる。

## (2) ボランティア

センターの場合、ボランティアは概ね3種に分類できる。もともとセンターを支援する目的で形成されたボランティア・ネットワークに学習活動参加を依頼したもの、センターについての取材や授業の見学を希望する人々を、学習活動参加という形で受け入れたもの、そしてこちらから働きかけてボランティアとしての参加を依頼したものの3種である。いずれの場合も、以下の要素が企画の際に考慮すべき要素となる。

参加可能な日時、および人数

所属（どういう人々か）、および参加の動機

所属についてはこれまでの参加者を分類整理したものを資料1として付した。参加の動機や目的については、参加者の興味・関心の所在によって以下のよう

- (a) 中国帰国者およびその2世3世に対する日本語教育に関心を持っている
  - (b) (a) 以外の中国帰国者問題（2世3世の適応問題も含む）に関心を持っている
  - (c) 日本語教育一般に関心を持っている
  - (d) 国際理解教育、異文化間教育、異文化交流、異文化間コミュニケーションに関心を持っている
  - (e) 中国、中国文化、中国現代史（特に日中関係史）、中国語に関心を持っている
  - (f) ボランティア活動に関心を持っている 等
- その他（ 以外のボランティアの状況）
- ・年齢 / 性別

- ・ 学歴 / 生活歴 (生活形態・職歴・社会的身分)
- ・ 所属する母文化及び異文化接触経験の有無  
母文化が日本文化の場合 (= 日本人の場合)
  - 異文化接触経験の有無 / その内容  
(相手文化は中国か、それ以外か等)
  - 中国語は話せるか、その程度は
- 母文化が日本ではない場合 (中国帰国者の先輩、外国人等)
  - 母文化は何か、在日年数、日本語の能力
  - 中国語は話せるか、その程度は
- ・ センターの学習活動参加経験
  - 初めて / ~回以上 過去にどんな活動に参加しているか  
今回のクラスは何回目か / 過去の参加内容  
希望する活動のタイプはあるか
- ・ 趣味、特技等
- ・ 連絡・打合せ等にさくことができる時間
- ・ (場合によっては) 負担できる活動経費の限度額 等

### (3) その他

前提条件として、安全性の確保 (特に活動がセンター外で行われる場合や、活動内容がスポーツ等事故の危険性を含む場合) については十分な配慮が必要である。また、例えば青年同士の交流というような場合、その内容が学習活動の一環としてふさわしいものかどうかという検討も必要となる。その他にも、設備、経費等、以下に列挙した教授者側の諸条件が関わってくる。

- ・ 物理的条件
  - 活動場所は確保できるか  
センター外で実習する場合は外部施設等が利用可能か
  - 使用機器、用具等必要な物が準備できるか
- ・ 経済的条件
  - 活動経費はどれだけ使えるか
- ・ 人的条件
  - 活動実施に必要な教授者数は確保できるか  
中国語を活動の媒介言語として用いる場合、中国語が話せる教授者が確保できるか 等

## 2-2. 活動内容

それでは、前節の諸要素を考慮して企画された活動は、実際どのようなものなのか。活動の分類にはいろいろの方法が考えられるが、本稿ではまず活動目的による分類を試みた。つまり、両者にとって活動がどういう意味を持つのか、両者の交流が何を目的としたものなのかという観点による分類である。過去1年の実践例は、この観点からすれば概ね次の5つに分類できる。

互いの生活、文化、背景事情をめぐって歓談する、情報交換を行う等のコミュニケーションを目的とする交流活動

1つのテーマをめぐり日中双方の立場から意見交換を行い、相互の異文化理解を深めることを目的とした交流活動

中華料理、日本料理を教える、または教えてもらうといった文化紹介的な「技能・技術」の伝達を目的とした交流活動

ゲームやスポーツ等のレクリエーションを通して、ともに楽しむことを目的とした交流活動

日本人を相手に生活場面でのタスクを達成する、または日本人の援助を受けつつ生活場面でのタスクを達成するといった行動達成を主な目的とした活動

は、両者の参加による場の形成という本活動の定義とは合致しない一面をもった活動である。参加の主体が学習者側にあり、ボランティア側がそれを援助する、またはそれを受け入れるという立場をとる活動であるため、この活動に関しては、学習者の視点による記述を行った。

この活動目的による分類（A）のそれぞれについてさらに活動形態による分類（C）を行い、その具体例（D）を示したものが、以下の「活動一覧」（表1）である。

また、教育プログラムとしての本活動の一面については、分類（A）ごとに、1 - 4で述べた教育目標の領域（B）として示すこととした。なお、備考欄（E）には、各活動の企画に関わる要件のうち特記すべきものについてのみ簡単に記述した。

[表1] ボランティア参加型学習活動一覧

A 目的	B 教育目標の領域	C 活動形態	D その具体例	E 備考
話題 情報 コミュニケーション	コミュニケーション力 (話題をめぐり歓談する) (情報収集・情報交換する) 日本事情に関する情報 ・異文化への興味と関心	自己紹介的な交流	・互いに紹介し合う(家族や故郷、趣味等の話題で互いに知り合う)	
		発表会	・発表会(自分のこと、中国のことを紹介する、発表の後質問を受ける)	
		インタビュー	・日本/中国 事情一般に関するテーマでインタビューする/される[家庭での男女の役割分担、生活時間帯、通勤手段と時間、趣味、行事、余暇の使い方、贈答の習慣等] ・自分の興味・関心を持った分野についての情報収集を行う[進学事情、アルバイト事情、日本人の持っている中国観等]	学習者の興味・関心に応じて 学習者の興味・関心に応じて
		ゲーム・クイズ (コミュニケーションゲーム)	・日本事情クイズ(中国についての)クイズを作り出題する、日本に関するクイズに答える。互いに正解を教える、疑問点を質問する)	学習者のレベルによっては中国語を用いる
			・日本事情すごろく(内容は同上)	学習者のレベルによっては中国語を用いる
			・中国語クイズ(中国語の漢字から意味をあてるクイズを作り出題する。日本人がわからない時はヒントを出す)	
			・ジェスチャーゲーム(出題された内容をジェスチャーで伝える、互いの言葉以外の部分でのコミカを競う)	学習者の性格を考慮しなければならない/ 青年学習者は日本語を初めて学習する者/ 研修初期
・連想ゲーム(出題された語彙を、ある条件のもとに他の語彙で説明する等の方法で伝え合う)				
・相手を特定するゲーム (家族、出身地、趣味等の条件にかなう人を質問して探す。)				
意見交換	異文化への興味と関心 日本事情に関する情報	座談会	テーマごとに日中の事情を紹介しあい、その背景や考え方の違い等について意見を交換する[日中トラブル事例をめぐって、日中の挨拶習慣、食文化、交際・訪問、近所づきあい、冠婚葬祭、贈答、職探し・仕事、職場の人間関係、住宅事情、学生生活、若者の流行、親子関係、老後の生活設計、親子関係、在日外国人事情等]	学習者の興味・関心に応じて/中国語が必要
技能伝達	コミュニケーション力 (指示する・指示を理解する) 異文化への興味と関心	技能教室(教える)	・自文化の中で身に付けた技能を相手に伝える (何を教えるか、どう教えるか計画を立て、実際に教える) 【中国語、中国料理(ぎょうざ等、中国の歌、手芸) 中国の遊び(将棋、トランプ等)、中国の健康法(太極拳)等】	ボランティアの興味・関心を事前にチェックする必要あり
		技能教室(教えられる)	・日本文化の中にある技能を教えてもらう 【日本料理、日本の歌、日本の遊び(将棋、トランプ等)生け花等] (【ミシンの使い方】)	学習者の興味・関心を事前にチェックする必要あり
レクリエーション	コミュニケーション力 (社会文化能力) (行動達成力) (指示を理解する) 異文化への興味と関心 日本事情に関する情報	スポーツ	・スポーツ等の娯楽を通して日本人と交流する (施設を利用する等計画を立て、日本人にルールを教えてもらう等して共に行楽する) 【ボーリング、野球、体育館での各種スポーツ、ハイキング等]	青年
		ゲーム	・ゲームを通して日本人と交流する(日本人にルールを教えてもらいゲームを楽しむ)[トランプ、UNO、オセロ、ピンゴ等]	青年
		その他	・待ち合わせして出掛ける(行動の計画を立て連絡し、待ち合わせ、観光したり、喫茶店で歓談したりする)	青年
行動達成	コミュニケーション力 (行動達成力) 日本事情に関する情報	行動達成	・援助者を得て目的とする行動を実際に達成する 【買い物、商店見学、図書館見学、写真をとり現像に出す等]	目的の行動達成が困難な学習者/ボランティアも可能ならば中国語を用いる
		ロールプレイ	・生活場面の模擬体験して行動達成する(模擬場面を設定、日本人を相手に与えられた行動場面を体験した後、相手からのFBを受ける) 【近所つき合い場面、来訪者への対応場面、就職面接場面等]	実習後半には参加者とのフィードバックの時間を設ける場合は、そこで中国語が必要
		体験実習	・一日体験入学(中学校に体験入学し、日本の中学生の生活を体験する)	中学生(中学編入予定の二世や高校進学を希望する二世)/研修後期

学習者とボランティアとの媒介語は特殊な場合（例：中国語専門学校の学生）を除けば全て日本語であるが、教授者が、学習者の母語である中国語を用いて両者の活動の援助に入る場合（通訳等）について、「中国語が必要」「中国語を用いた方がよい」「学習者のレベルによっては中国語を用いる」等を記述。

学習者およびボランティアの年齢層や社会的身分が限定される活動の場合、「青年」、「中学生」等と記述。

学習者および学習段階が異なっても、内容を調整すれば、具体例（D）に挙げた活動を組むことは可能である。しかし中には、学習者タイプ、学習段階が限られるものもある。そういう活動に関してのみ備考に記述した。

### 3. プログラム評価の試み

#### 3-1. プログラム評価の必要性

本活動が教育プログラムである以上、常に学習効果を客観的に評価すること、そして本活動のカリキュラムに占める位置づけを確認することは不断に続けられるべきであろう。これは学習活動計画者である教授者が当然行うべき評価活動であるが、本活動の場合は、それにボランティアに対する視点、またボランティアによる評価の視点に加わる。本活動の性格上、ボランティアにとっての活動の意味を考慮することなしに、本当の意味での場の共有及び場の活性化は不可能であるし、こうした活動それ自体の今後の継続も不可能であろう。つまり教育評価を当然内包した全体的プログラムの評価が必要となる所以である。

上述した意味でのプログラム評価のシステムを作ることで、プログラムを改善していくこと、少なくとも失敗のないプログラムを組めるようになることが当面の課題となるが、そのためには活動の4要素（1-3）を考慮し、活動の企画から最後のフィードバックまでの各段階における評価の観点と基準を設定していくこと、それを積み上げ、学習者にとっての学習効果を測定し、ボランティアにとっての参加の意味を問いかけていくことが必要である。第3章ではこの評価システム作りの第一歩として、第37期から38期（1992.6月～1993.1月）にかけて行った試みについて報告する。

### 3-2. 評価者

評価の要件としては、評価者（誰が）、評価対象（何について）、評価の目的（何のために）、評価の観点（どんな観点で）、評価の方法（どんな方法で）、そして評価の活用法（その結果をどう活用していくのか）の5項目が挙げられる。評価の目的については上に述べたので、ここではまず評価者について述べる。

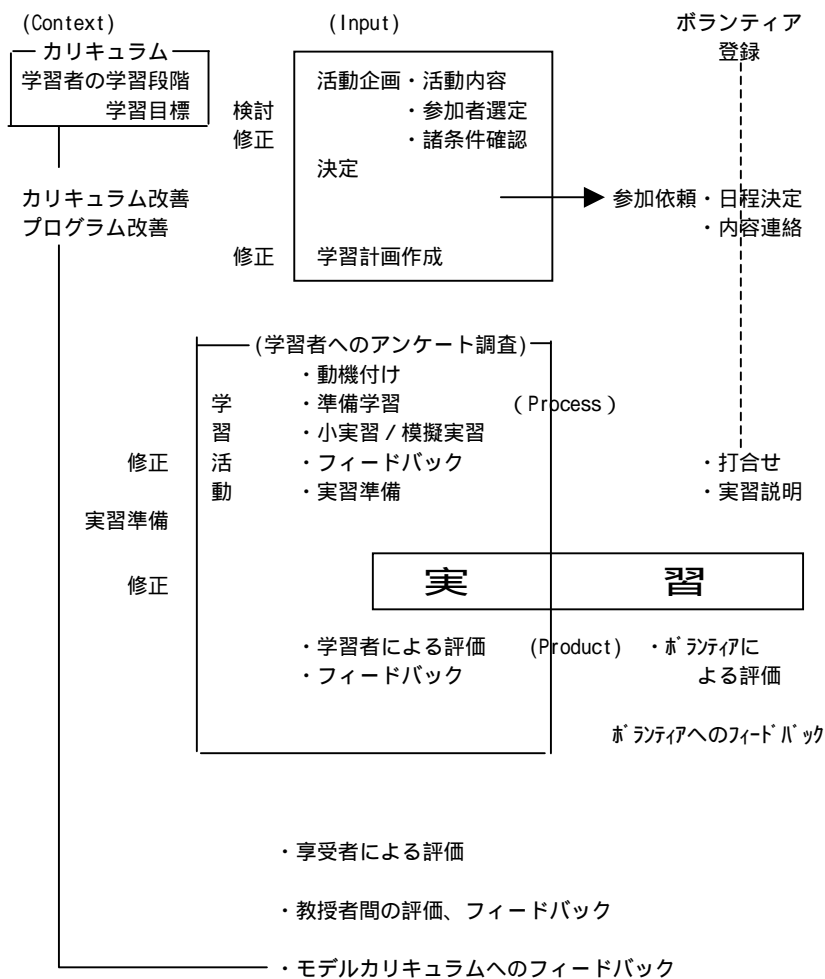
評価はそのプログラムの関係者である「教授者」、「学習者」、「ボランティア」、それに加えて、客観的にプログラムを見ることができる「第三者」、この4つの立場による評価が可能である。センターでは評価システム作りの第一歩として、まず「教授者」及び「ボランティア」によるプログラム評価を取り挙げ、それぞれ評価表の開発を行うこととした。

「学習者」による評価は従来から試みられてはきたのだが、学習者がいわゆる「公式見解」（政府や日本国民、センターに対する謝辞）に終始するのを避けられず、評価活動として成果をあげることはこれまで困難であった。これは中国の社会文化的な背景事情によるものかもしれないし、国費で帰国して研修を受けているというセンター研修生の立場に起因するものであるかもしれない。いずれにせよ、この問題の解決は今後の大きな課題である。また、「第三者」による評価も実施が困難なため今後の課題となった。プログラムに関する全ての流れについてデータを集め、第三者がそれを客観的に評価することは必要なことではあるが、実用性の観点からは問題が多い。まずは、学習活動計画者でありプログラムのコーディネーターである教授者が、自らプログラム評価を行い自己研修できるシステムを作っていくことが重要であると我々は考えた。

### 3-3. 教授者によるプログラム評価

図2は、企画から一連の学習活動、活動の場（以下実習とも呼ぶ）、そしてフィードバックに至るプログラムの流れを示したもののだが、評価はこの全過程について行われる。評価のタイプと過程は、おおむねStufflebeam(1983)のCIPPモデルに依拠し、当センターの実情に沿って変更を加えたものをモデルとした。

[ 図 2 ] 「ボランティア参加型学習活動」の流れ<sup>1)</sup>



まず、学習者またはクラスの学習段階を診断し、カリキュラムに則った学習目標の設定に関するC(context)評価を行う。次に、それに見合った実習内容を企画するとともに学習者に与える具体的な課題を決定し、その実行可能性の検討を行う。これはI(input)評価と呼ばれる。いよいよ学習活動が開始されたら、各々の活動毎にその達成度および設定目標や方法の適切さを評価していき、必要があれば途中で軌道修正を行う。また教室活動以外で実習の実施に必要な準備、例えば会場の予約や参加ボランティアの選定、ボランティアへの事前の連絡等の進行状況もチェックしていく必要がある。これらの過程での評価がPc(process)評価であり、これは実習の終了する直前まで行われる。実習終了後、学習者の目標達成度の評価および参加ボランティアの満足度の評価すなわちPd(product)評価を行う。これらのPd評価の結果により、教授者は必要があれば参加者双方にフィードバックを行う。

評価の対象と観点はこの流れをもとに設定した。

本来プログラム評価は、プログラムの各段階で行い、軌道を修正し、プログラムを成功に導く目的も持っているが、センターの場合は、まず過去の実践例を評価し、その結果を次回の改善に役立てるというシステムで行うこととした。この評価を積み重ねることで、教授者の自己研修が簡便に行えるようにすること、それが最終的にプログラム改善につながるものと考えた。評価方法としては、プログラム全体に対して5段階、各対象と観点ごとに3段階の尺度で、プログラムの終了時に担当教授者が主観的に評定を行うこととした(資料2)。また、この結果から特に問題点のあった項目について自己点検を行うことを目的とした第2段階のプログラム評価表も作成した(資料3)。これは、プログラムの計画段階(context)・(input)、実施段階(process)各段階で考慮すべき事項を教授者間で確認した上で、できるだけ共通の基準で客観的に評価するために観点を具体的に細目化してチェックできるようにしたものである。

- 1) 実習の規模は平均1～2時間だが、関連する学習時間は活動内容により、小規模なものは2・3時間、大規模なものはプロジェクトワークとしての取り組みを含んだ10時間、15時間を超えるものまでさまざまである。また、学習



計画の中に占める「実習」の位置付けも、あるものは、実習を最終目標として準備学習を積み上げ、あるものは実習を導入としてそれ以後の学習活動の動機付けに用いる等様々である。図2では、このうち最も基本的と思われる学習計画の展開例を取り上げ太線で示した。

### 3-4. ボランティアによるプログラム評価

これは、センターで従来自由記述形式による感想文という形でボランティアに提出を依頼していたものを、プログラム評価として活用できるものに構成しなおしたものである。

ボランティアによる評価の場合、評価の対象は、事前の連絡・説明および活動の場、そして活動終了後のフィードバックということになるが、今回はまず活動の場に絞り、ボランティア自身の満足度についての自己評定を引き出すための評価表を作成することとした。満足度を測るための観点設定に関しては、金子（1992）を参考に、満足度のカテゴリーを以下の5項目に分類した。

- 「動的情報」の有無
- 1 相手に何かを「あげた」という実感
  - 2 相手から何かを「もらった」という実感
  - 3 相手と何かを「共有した」という実感

「静的情報」の有無

プログラム自体に対する評価

再度の参加希望の有無

金子によれば、「ボランティア」は、経済的なものではないがある種の「報酬」を求めて行動する人々であり、その「報酬」とは、ある種の「情報」である。それは例えば「相手から助けってもらったと感じたり、相手から何かを学んだと思ったり、誰かの役に立ってると感じてうれしく思ったりすることのような、「相手との相互関係」の中でみいだされる「価値」のことを指すとして、それを「動的情報」と名付けている。この「動的情報」をとし、これをさらに3つに分類、相手に喜んでもらえた、相手の達成感が感じられた等、相手の役に立つことができたという充実感を - 1 に、また、新鮮な体験だった、勉強になった、偏見を持っている自分に気づいた等、自分にと

って意味があったとするものを - 2 に、そして、楽しかった、おもしろかった、友達になれた等、ふれあいを感じ時間を共有したという充実感につながるものを - 3 とした。この は、いわゆる満足感や充実感、達成感、感動等の情緒面の「動き」のあるものと規定し、こうした情緒面での「動き」を伴わない知識や情報の獲得についてはこれを と分類した。この2つの有無を満足度測定の観点の中心にすえた。本活動の趣旨からいえば、 が得られたかどうか、一番重要な観点となる。この が得られるときには知識、すなわち も獲得されていると言える。また一方で、 にいたらない の段階で止まっていると考えられる状態もあるわけで、この場合も広く「情報の獲得」という意味で満足度の観点に加えることとした。 は活動における個々の具体的な側面に対する評価として現れたものを指しており、 が活動の場に対する満足度の観点とすると、 はそれを部分的に補強する、もしくは部分的に評価するものと考えた。 は、直接満足度を表すものではないが、センターの実習に対する期待や希望の指標となるものと考え評価の観点に加えたものである。

この分類をもとに、質問項目を作成、それぞれについての5段階尺度による主観的評定を求めたものが、今回作成したボランティアによるプログラム評価表である(資料4)。評価の活用法としてはまず第一に、教授者によるプログラム評価への還元が挙げられる。教授者の依頼による質問紙という性格上、儀礼的に高評価となることは避けられないが、相対的に評価が低かったもの、また、教授者が評定したボランティアの満足度(教授者によるプログラム評価中)とボランティア自身によるそれとが大きくずれたものについては、その原因を洗い出しプログラムを改善する際の有効な資料となるものである。その他には、実習終了後のボランティアへのフィードバックの資料として、また今後の参加を依頼する際の参考資料としての活用も可能である。とくに後者は、今後のネットワーク形成、維持のための情報として重要である。

なおこの3章の3と4で報告した評価表の作成過程及び内容の詳細については(佐藤他、1993)を参照されたい。

#### 4. 実践結果の報告

本章では、これまで述べてきたセンターのボランティア参加型学習活動の実態および評価活動の結果を第38期について報告していくこととする。表2は、活動形態別に実施件数および参加人数、担当教授者のそのプログラムに対する全体的評定（以下担任総評と称する）および参加ボランティアの満足度に関する6項目の評定合計点（階級値を5として算出、以下参加者評価と称する）の分布を示したものである。併せて担任総評および参加者評価の活動形態ごとの平均値も参考までに示した。ただし、実施件数・参加人数が極端に少ない実習の場合、平均値の算出はあまり意味がないと考え、5件未満のものについては算出しなかった。担任総評については座談会の他は「自己紹介的な交流」「スポーツ」の3形態のみについて平均値を算出した。参加者評価も参考までに示したが、実施件数が少なかったため、これらの数値が表しているのは個々の活動形態に対する評価というよりは第38期の実施分についての評価であると捉えるべきであろう。

〔表2〕 第38期：活動形態別担任総評・参加者評価

	活動形態	件数	担任総評					参加者評価						
			2	3	4	5	平均	10	15	20	25	30	参加人数	参加者平均
1	1.自己紹介的な交流	6	0	2	4	0	3.67	0	3	17	4	0	30	18.53
	2.発表会(自己紹介、日本事情等)	2	0	1	0	1		0	0	3	3	0	7	19.85
	3.インタビュー	1	0	1	0	0		0	0	0	3	0	3	
	4.1.+ゲーム・クイズ	2	0	0	1	1		0	0	2	13	1	18	22.37
	1の合計	11	0	4	5	2	3.79	0	3	22	23	1	58	20.94
2	5.1.+座談会	21	1	11	7	2	3.48	1	7	43	37	3	100	19.57
3	6.教える(キョウガ作り党)	2	0	0	1	1		0	0	0	6	1	9	22.00
	7.+教えられる(歌、中国語等)	2	1	0	0	1		0	1	1	5	1	8	19.75
	3の合計	4	1	0	1	2	4	0	1	1	11	2	17	20.88
4	8.1.+ゲーム(UNO等)	1	0	1	0	0		0	0	1	3	0	4	
	9.スポーツ(ボートリング、バスケ、キャッチボール等)	5	1	0	3	1	3.8	0	0	4	10	0	15	21.14
	4の合計	6	1	1	3	1	3.4	0	0	5	13	0	19	20.82
	11.行動達成(イベントリング、図書館利用等)	1	0	1	0	0		0	0	1	0	0	1	
5	12.ロールプレイ(面接、近所付合等)	3	0	1	2	0		0	0	3	3	0	7	20.93
	5の合計	4	0	2	2	0	3.33	0	0	4	3	0	8	18.97
	13. 12.+5.	1	0	0	0	1		0	0	2	2	0	4	21.30
6	15.4.+5.	3	1	1	0	1		0	0	1	5	0	8	21.40
	16.3.+5.	2	0	1	1	0		0	1	5	2	0	10	18.65
	18.2.+5.	3	0	2	1	0		0	2	2	1	0	6	15.90
	19.7.+8.	1	0	0	0	1		0	1	0	5	1	7	20.70
	6の合計	10	1	4	2	3	4.03	0	4	10	15	1	35	19.59
	全体合計	56	4	22	20	10	3.77	1	15	85	102	7	237	20.16

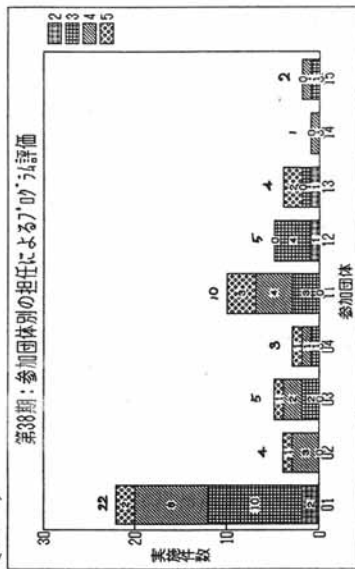
表2によれば、実施件数が最も多い活動形態は「座談会」の21件で、これは全活動件数56中の37%に相当する。参加人数も100人と最も多（全体の42%）であり、座談会に最も関心が高いことがわかる。ただし、評価の蓄積が最も急務とされているのは「自己紹介的交流」の6件であり、参加人数は30人であった。

図3、4には、参加団体別に担任総評および参加者評価の分布を構成比および参加者数で示した。ただし、この図では参加者評価の記入されているもののみを取り上げたので、実際の参加者数はこれよりも多くなる。内訳は、01～04がおおむね30歳以上の成人ボランティアでこのうち03は個人参加者である。その他の成人参加者では地域の公民館等の社会教育活動の一環として参加した例が多い。11～15はおおむね20代以下の青年ボランティアでこのうち11は個人参加者、15が帰国者支援組織の下部組織である。その他の青年ボランティアはほとんどが大学や専門学校の授業の一環としての参加である。

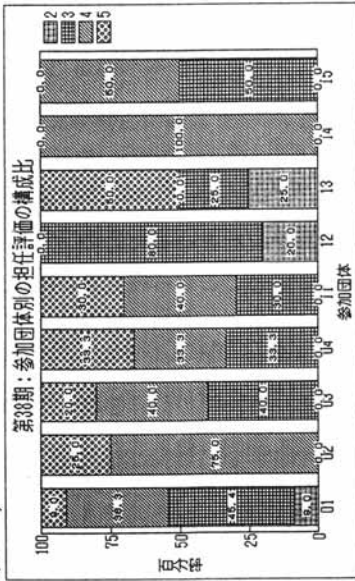
成人ボランティアで参加件数の最も多いのは、センターの開所翌年から実習への参加・協力を得ているボランティア団体（表の01）である。青年ボランティアの場合は、最も多いのは個人参加者であるが、この内訳はほとんどが大学生で、大学の授業・ゼミの発表や卒業論文のテーマとして日本語教育や帰国者の適応問題等を取り上げた者である。

参加団体別評価に関しては、団体によって評価の分布が若干異なることが問題として挙げられる。団体14は4人と少ないため考慮には入れないが、評価が下方寄りのものが散見される。これは、我々がこれら参加団体の参加動機を適切に把握できず参加ボランティアが満足できる企画を立てられなかったことを表している可能性もある。活動形態自体が内包する問題の解決を含め、ボランティアの参加動機を把握することも今後の課題と言えよう。

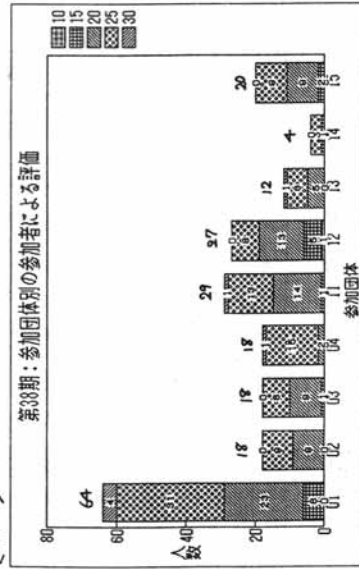
〔図3-1〕



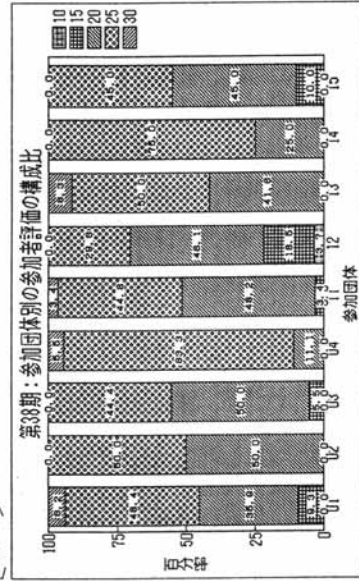
〔図3-2〕



〔図4-1〕



〔図4-2〕



## 5. 今後の課題

### (1) 学習者によるプログラム評価

学習者によるプログラム評価は、現段階でも、教授者が活動実施後に感想を口頭で尋ねる、または幾つかの視点を提示した上で自由記述による感想文の提出を求める等の方法で行われてはいるが、3 - 2で述べたように、より具体的、客観的な評価表の開発が必要である。これは教授者によるプログラム評価にフィードバックするためでもあるが、それ以上に、学習者の視点を活動評価へと向けさせることがねらいである。学習者自身が評価の基準を持ち、活動からどんな気づきを得られたか、活動が自分の能力向上のために実質的にどのように役立ったかを意識させることが重要である。

### (2) 教授者による評価のシステムの改善

3章で報告した教授者によるプログラム評価表は、担当教授者の自己評価型のものであり、これは教授者の自己研修の目的を合わせ持つものであった。この研修効果をあげるためにも、評価の客観性、信頼性を高めるためにも、やはり第三者による評価が必要となるが、今後の課題としては、新たにそれを開発するのではなく、あくまでも自己評価を中心にそこに第三者による評価を組み込む、または第三者との合議による評価を組み込むという方向が実際的だと考えられる。

これは評価表および評価方法の改善の問題であるが、これに加えて、蓄積した評価の集計分析から洗い出された問題点を複数の教授者間で検討しプログラム改善を図っていくというシステムを作っていくことも必要だと思われる。

### (3) ネットワークの組織化と拡大

現在、ボランティアとして本活動に参加している団体、個人は、様々な年代、背景を持ち、年々広がりを見せているが、大学の授業の一環としての参加や、一部の団体、個人以外は、まだ継続的、計画的な参加を期待できる状態に至っていない。この状態を改善しより安定性を持たせるためには、4ヶ月毎にボランティア希望者に対して、定期的、継続的参加を依頼できればよ

いわけだが、そのためには、ボランティア参加希望者自体の組織化、あるいは、組織化されたボランティア団体とのネットワークの拡大を考えていかなければならない。例えば、勤労者層の日本人の参加を希望する場合、企業内における社会貢献策であるボランティア休暇制度などへのアクセスも可能性の1つであろう。

## 【参考文献】

- 尾崎明人, J.V. 祢ストプニ(1986)「インターアクションのための日本語教育 - immersion program の試み - 」『日本語教育』59号
- J.V. 祢ストプニ(1989)「日本人のコミュニケーション行動と日本語教育」『日本語教育』67号
- 岡崎敏雄(1991)「コミュニケーション・アプローチ - 多様化における可能性 - 」『日本語教育』73号
- 安場淳他(1991)「異文化適応教育と日本語教育1-体験学習法の試み-」凡人社
- 佐藤恵美子他(1992)「異文化適応教育におけるボランティア参加型活動のプログラム評価にむけての実践的研究」日本語教育現職者特別研修終了レポート
- 小林悦夫他(1993.7予定)「中国帰国者に対する日本語教育のカリキュラム開発に関する調査研究」文化庁
- 「特集 = 異文化間教育と国際理解」『異文化間教育』2号, (1988)
- 「国際化と異文化教育 日本における実践と課題」『現代のエスプリ』299号, (1992)
- 大塚芳子 (1987)「渡航前の子供たち」『異文化とのかかわり』川島書店
- 全国社会福祉協議会異文化適応教材開発委員会(1987)『入郷随俗 中国帰国者の日本社会への適応をめざして』全国社会福祉協議会
- Madaus, et al. (1987). Program Evaluation: A historical overview. In G.F. Madaus, M.S. Scriven, and D.L. Stufflebeam, Evaluation Models: Viewpoints on educational and human services evaluation. Boston: Kluwer-Nijhoff.
- Stufflebeam, D.L. et al. (1971) The CIPP Model for Program Evaluation. Madaus 前掲書
- 中村重穂(1990)「地域社会の国際交流と日本語教育 - 国立市における実践報告 - 」『日本語教育』70号

金子郁容(1992)『ボランティア - もうひとつの情報化社会 - 』岩波新書  
今井賢一・金子郁容(1988)『ネットワーク組織論』岩波書店  
石井威望(1988)『生涯学習ネットワーク開発マニュアル』.  
春原憲一郎(1992)「ネットワーキング・ストラテジー - 交流の戦略に関する基礎研究 - 」『日本語学』1992年10月 .

資料1 2-1.(2) - 「ボランティアの所属」

- (1) 日本語教育関係者（教師および教室運営者）  
中国帰国者を対象とする日本語教育及び適応教育関係者  
以外の第二言語教育としての日本語教育関係者  
（インドシナ難民、日系外国人等を対象とする教育等）  
以外の日本語教育関係者（日本語教師養成コース受講者等も含む）
- (2) 中国帰国者の地域への定着を援助する官公庁関係者
- (3) 学校教育関係者  
中国帰国者二世・三世受け入れている学校の教育関係者  
以外の外国人子女を受け入れている学校の教育関係者  
（日系外国人子女、中国系外国人子女等）  
国際理解教育を研究している学校の教育関係者
- (4) 大学・大学院生（日本語教育、その他外国語教育、社会福祉、国際理  
解教育、国際関係学等を専攻する大学生・大学院生  
、及びその教育担当者）
- (5) 中学生・高校生（地域の中高生等、クラス活動、生徒会活動、クラブ  
活動として。またその指導担当者）
- (6) 地域のサークル  
センターを支援する目的で結成されたボランティア団体  
以外の中国帰国者を支援する目的で結成されたボランティ  
ア団体  
小中学校PTA、公民館等各種市民サークル
- (7) 中国語学習者（中国語専門学校の日本人学生等）
- (8) その他（帰国者先輩、個人参加の一般社会人等）



### 資料3 3-3.「教授者によるプログラム評価」(第二段階)

ボランティア参加型活動 《担任プログラム評価》 担任名( )  
 . ( )期( )クラス 実習日( )月( )日 時間( )#( )  
 . 活動タイプと内容( )  
 . 各プログラム段階の考慮項目(□内)については、プログラム進行と並行して点検項目として利用してください。  
 評価欄・チェック欄はプログラム終了後、記入してください。

【記入要領】

まず、添付されている実習プランの実習目的と課題を確認し、頭に入れた上で評価を開始してください。  
 次に、プログラムの流れに沿って、各段階における4段階評価をしてください。  
 評価が3以下の場合、各プログラムの細目について問題ありの箇所にチェックしてください。  
 問題の具体的記述や、修正案、改善案があれば右欄に記入してください。  
 各段階の評価、記述が終わったら、学習者の課題達成度4段階評価してください。  
 最後に本活動プログラムの全体評価をしてください。  
 他、感想、アイデア等あればコメント欄に書いてください。

- |    |                       |  |
|----|-----------------------|--|
| 1. | 目標課題<br>決定段階          | (1) 学習者の適性・タイプに合っていたか ( ) _____<br>(2) 将来への必要度 ( ) _____<br>(3) 4ヶ月の中の実施時期 ( ) _____<br>(4) 課題の難易度、量、個別化 ( ) _____<br>(5) 他 ( ) _____  |
|    | 評価 (☺☹☹☹☹)<br>4 3 2 1 |  |
| 2. | 活動計画                  | (1) 目標にあった活動か ( ) _____<br>(2) 活動アイデア ( ) _____<br>(3) 金銭的条件(実習人の関係) ( ) _____<br>(4) 物理的条件(センター事情、外部事情等) ( ) _____<br>(5) 学生の負担度(心身両面) ( ) _____<br>(6) 他 ( ) _____   |
|    | 評価 (☺☹☹☹☹)<br>4 3 2 1 |  |
| 3. | ボランティア決定<br>段階        | (1) 参加動機と活動の合不合 ( ) _____<br>(2) ボランティアの生活背景(年齢、性別・身分・生活歴等) ( ) _____<br>(3) ボランティアの持っている条件(実習参加経験、中国語等) ( ) _____<br>(4) 他 ( ) _____  |
|    | 評価 (☺☹☹☹☹)            |  |
| 4. | 学習計画<br>段階            | (1) 学習活動の全体の流れ ( ) _____<br>(言語・コミュニケーション、リール、日本事情、実習、F B等)<br>(2) 動機付け内容・方法 ( ) _____<br>(3) 時間配分 ( ) _____<br>(4) 担当者配置(中国語話者か否か、クラス出演頻度等) ( ) _____<br>(5) 授業内容、教材準備 ( ) _____<br>(6) ボランティアへの連絡 ( ) _____<br>(7) 他 ( ) _____ |
|    | 評価 (☺☹☹☹☹)            |  |
| 5. | 学習活動<br>段階            | (1) 授業連絡 ( ) _____<br>(目標、課題の伝達、授業展開・方法の伝達、学習者情報、プログラム進行状況)<br>(2) 授業F B(計画上の問題、目標・課題達成度、学習者状況) ( ) _____<br>(3) 計画修正(時間割、授業内容、方法等) ( ) _____<br>(4) 他 ( ) _____   |
|    | 評価 (☺☹☹☹☹)            |  |
| 6. | 実習段階                  | (1) 参加者への直前説明・確認(学習者、ボランティア) ( ) _____<br>(2) 物理的な準備(会場、小道具) ( ) _____<br>(3) 実習の進行・コントロール(流れ、方法、時間、ムード) ( ) _____<br>(4) ハプニング対処(参加者の遅刻・早退、参加者間のトラブル) ( ) _____<br>(5) 他 ( ) _____  |
|    | 評価 (☺☹☹☹☹)            |  |
| 7. | 参加者への<br>F B段階        | (1) 参加者(学習者、ボランティア)へのF B項目の選択 ( ) _____<br>(2) F Bの方法 ( ) _____<br>(3) 他 ( ) _____   |
|    | 評価 (☺☹☹☹☹)            |  |

資料3

学習者の各課題の達成度（課題# は実習プランに記載のものに対応する）

課題# 達成度

- (1) (☹️☹️☹️☹️) (4) (☹️☹️☹️☹️)  
 (2) (☹️☹️☹️☹️) (5) (☹️☹️☹️☹️)

プログラム全体評価 (😊😊😊😊😊)

コメント欄

参加者との事前打合せ事項の確認

- 凡例：(V)；確認済( )=未確認(X)；不要  
 センターの役割と「帰国孤児」とは何か ( )  
 クラス・学習者 年齢 / 本人配偶者二世の別 / 男女比 ( )  
 センターでの学習期間と既習事項 ( )  
 中国での経歴等のバックグラウンド ( )  
 日本語力 ( )  
 将来の希望(例:進学or就職) ( )  
 クラス内の特記すべき人間関係 ( )  
 その他[ ] ( )  
 参加者 経歴・現在の身分等 ( )  
 中国語の可不可 ( )  
 中国人・中国文化との接触経験 ( )  
 その他[ ] ( )  
 実習趣旨・目的 日本語コミ寄りor日本事情寄り ( )  
 活動内容と学習者の課題 ( )  
 参加者にやってほしい役どころ ( )  
 参加者に準備してほしいもの・こと ( )  
 学習者分の領収書取りの補助 ( )  
 その他[ ] ( )  
 拘束時間 実習時間自体 ( : ~ : ) ( )  
 事前の説明会 ( : ~ : ) ( )  
 事後の感想会 ( : ~ : ) ( )  
 費用負担[ ]代に[ ]円ぐらい ( )  
 (センター往復以外に)

研修棟までの道のりと所要時間 ( )

・JR新宿～高田馬場(5～10分)で西武新宿線に乗換～航空公園(33～36分):約45～50分

または西武池袋線:池袋～所沢乗り換え～航空公園:約35～40分航空公園駅東口

・航空公園駅からは、西武バスで5分または徒歩15～20分

バス 1 番乗場:並木通り団地行きor大宮駅行きで秩父学園入り口:5分で下車即眼前

エスデンティ所沢行きで秩父学園入り口下車、西へ200mほど戻る 2 番乗場:所沢駅東

口行きで秩父学園入り口下車、北へ200mほど戻る

タクシーで4分 ただし昼間は本数少ないまた、宿舎と間違える運転手さんもいるので、(航空公園の北側の)研修棟とはっきり告げる必要あり

研修棟までの道のり ( )

JR新宿～高田馬場で西武新宿線に乗換～航空公園(33～36分):約45～50分

又は、西武池袋線:池袋～所沢乗り換え～航空公園:約35～40分航空公園駅東口

航空公園駅からは、西武バスで5分または徒歩15～20分

バス: 1 番乗場:並木通り団地行きor大宮駅行きで秩父学園入り口:5分で下車即眼前

エスデンティ所沢行きで秩父学園入り口下車、西へ200mほど戻る

2 番乗場:所沢駅東口行きで秩父学園入り口下車、北へ200mほど戻る

タクシー:4分ただし昼間は本数少ないまた、宿舎と間違える運転手さんもいるので、(航空公園の北側の)研修棟とはっきり告げる必要あり

資料2 3-3・「教授者によるプログラム評価」(第一段階)

外部協力者実習 担任用記録用紙 担任名( )

1. 1( )期( )クラス 実習日( 月 日)時間( )#( )

2. 活動タイプと内容( )

3. 担任の一連の学習活動への全体的評価 (☺☹☹☹)

(担任以外が実習担当の場合、その担当者の評価) (☹☹☹☹)

企画のアイデア自体は妥当だったか( )詳細:

学習者に与えた課題のレベルと量は適当だったか( )詳細:

動機づけ・準備からFBに至る一連の時間割りの組み方は適当だったか( )詳細:

実習実行上の教師の段取りは足りていたか( )詳細:

(例: 下見、領収書、参加者との連絡等)

実習その場でTは臨機応変に対応できたか( )

参加者がこの企画に合っていたか( )詳細:

参加者の反応(ノリ)の感触は( )詳細:

新アイデアを試行した場合、その実用性=次回以降からの実施に伴う労力)(楽 可 大)

4. 学習者の各課題の達成度(課題#は実習プランに記載のものに対応する)

課題# 達成度 場合、その原因と考えられるもの

( )課題不適・動機づけ不足・練習不足・T采配失敗・参加者不適・その他( )

( )課題不適・動機づけ不足・練習不足・T采配失敗・参加者不適・その他( )

( )課題不適・動機づけ不足・練習不足・T采配失敗・参加者不適・その他( )

( )課題不適・動機づけ不足・練習不足・T采配失敗・参加者不適・その他( )

( )課題不適・動機づけ不足・練習不足・T采配失敗・参加者不適・その他( )

( )課題不適・動機づけ不足・練習不足・T采配失敗・参加者不適・その他( )

5. 参加者との事前打合せ事項の確認 凡例:(v)=確認済み( )=未確認 (x)=不要

クラス・学習者 年齢/本人配偶者二世の別/男女比

センターでの学習期間と既習事項

中国での経歴等のバックグラウンド

日本語力

将来の希望(例:進学or就職)

クラス内の特記すべき人間関係

その他〔

参加者

経歴・現在の身分等中国語の可不可】

中国人・中国文化・センターとの接触経験

その他〔

実習趣旨・目的 日本語コミ寄りor日本語

活動内容と学習者の課題

参加者にやってほしい役割

参加者に準備してほしいもの

学習者分の領収書取りの状況

拘束時間

その他〔

実習時間自体

事前の説明会

事後の感想会

費用負担

〔(センター往復以外に)

研修棟までの道のりと所要時間

・JR新宿~高田馬場(5~10分)で西武新宿

または 西武池袋線:池袋~所沢のりかえ~航空

地行き。「大宮駅行きで秩父学園入り口=5分

バスの時刻の標注 または 徒歩:航空公園~

一:航空公園~研修棟=4分 但し昼間は本教

自由記述欄 (左頁で書き切れない分+

資料4 3-4 「ボランティアによるプログラム評価」

実習に参加して下さ

本日は当センターの実習にご協力ありがとうございました。当センターでは、学習者が少しでも日本の生活へのイメージと自信・意欲を持ってくれること  
交流を通して、学習者・ボランティアの皆さんが共に言葉の通じにくい相手とのコミュニケーションに親しみ、互いの文化への理解を深めることができ

以下、今後のセンターでのよりよい指導の参考にさせていただくため、アンケートにご協力ください。お答えを他の目的に利用することは一切ありません  
よろしくお願いたします。

(大人・青年・大人青年混合) 今回で参加は： 回目、前回参加： 年 月ごろ

以下の問いにはそれぞれ5段階の自己評価および自由記述でお答えください。

1. 今日、センターの学習者にとって役に立ったという実感がありましたか。 ・どんな点で?					
2. ではあなた自身にとって実習は意義がありましたか? ・どんな点で?					
3. 実習に参加してみて楽しめましたか? ・どんな点で?					
4. 帰国者・中国人・中国文化に対する考え方に変化や発見がありましたか? どんな点で?					
5. コミュニケーションが取れたという達成感は、ありましたか? ・どんな点で?					
6. この実習の企画のアイデア自体はどうでしょうか?					
7. 今後、センターの実習への参加について	・何とかして参	・都合がつけば		・活動の内容に	・何ともしえな